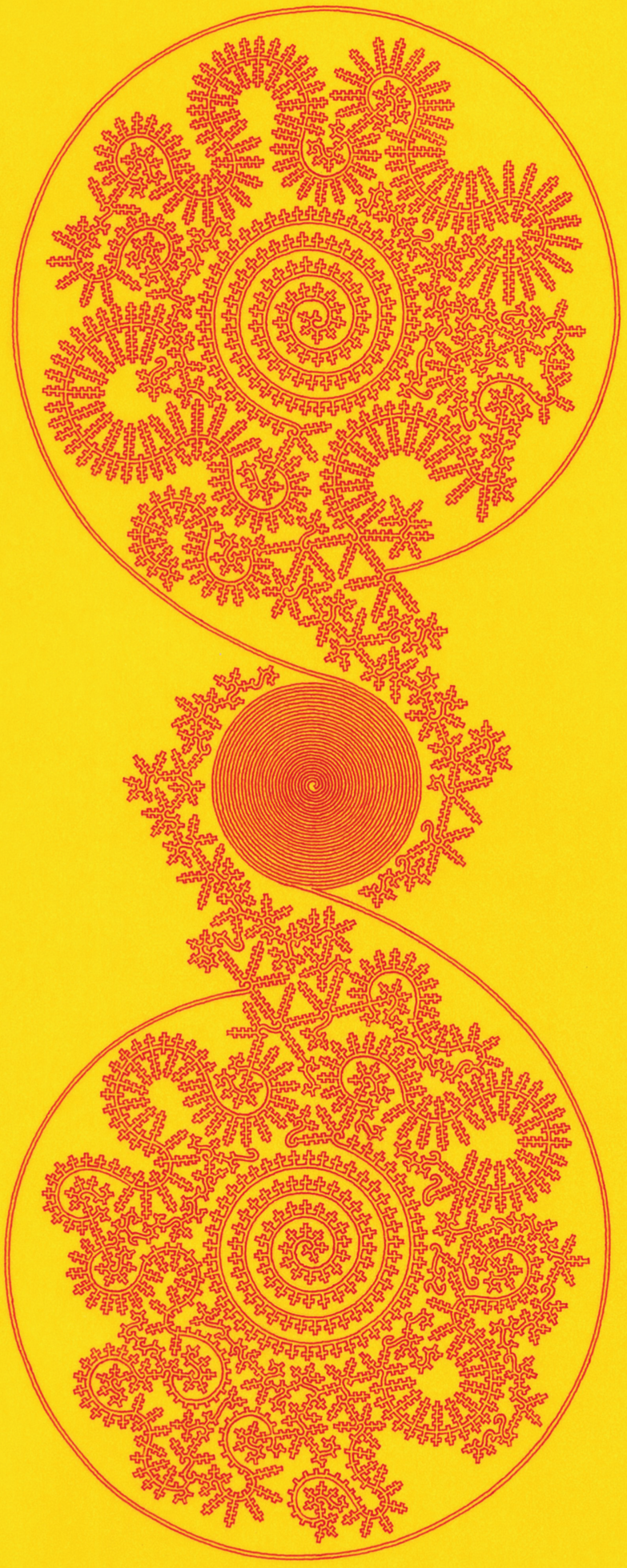
死者の書



構成：木野彩子
音：やぶくみこ（作曲、ガムラン・パーカッション、歌）
　杵屋三七郎（江戸長唄）
照明デザイン：三浦あさ子
おどり：木野彩子
舞台監督：北方こたち（鳥取公演）
ドローイング：小川敦生
チラシデザイン：小木央理
主催：鳥取大学地域学部附属芸術文化センター、キノコノキカク【鳥取公演】
　城崎国際アートセンター（豊岡市）【城崎試演会】
助成：文化庁（平成30年度 大学における文化芸術推進事業）

城崎試演会

滞在制作
九月三日（月）～一七日（月）

試演会（無料公演）
九月一五日（土）夜七時～
一六日（日）夕二時～

城崎国際アートセンター（KIAC）
兵庫県豊岡市城崎町湯島1062
観覧申込、問い合わせ：tel. 0796-32-3888
mail. info@kiac.jp　web. http://kiac.jp/

Toyooka Art Season 2018
参加事業

鳥取公演

一二月二七日（木）夜七時半～
一八日（金）夕三時～

とりぎん文化会館小ホール
鳥取県鳥取市尚徳町101-5
tel. 0857-21-8700
web. http://site.torikenmin.jp/kenbun/

チケット
一五〇〇円（小学生以下無料）
チケット予約、問い合わせは、会場もしくは
キノコチケット：kinokoticket@gmail.com
鳥取大学地域学部附属芸術文化センター：
tel. 0857-31-5130（木野研究室）

大学から文化力 POWER OF CULTURE
文化庁
KIAC

『死者の書』とは…稀代の民俗芸能学者であり、詩人釈迢空としても活躍した折口信夫が当麻寺に伝わる曼荼羅を織り上げた中将姫の伝説をもとに書き上げた自伝的小説。

あらすじ…平城京の都の栄える頃のこと、春の彼岸中日、二上山に日が落ちるとき藤原南家の郎女（中将姫がモデルとされる）は尊い俤びとの姿を見た。それ以来、千部写経の成就に導かれ、非業の死を遂げた滋賀津彦（大津皇子がモデルとされる）とまみえ、尊い俤びとと重なるその姿を蓮糸で曼荼羅に織り上げて行く。全てを成し遂げることで郎女は、さまよう魂を鎮め、自らも浄土へといざなわれていく。

滋賀津彦、郎女両方の世界を映画のコラージュのように構成しているだけではなく、折口本人も「書いている中に、夢の中の自分の身が、いつか、中将姫の上になっていたのであった」（『山越しの阿弥陀像の画因』）と書いており、この世とあの世、男性性と女性性が交錯している独特の世界は、著者折口の魅力もあって長く多くの読者を魅了してきました。

本プロジェクトはこの世とあの世、時空を超えてただ祈る、希うという舞踊の根源に立ち返り、折口が芸能研究から見出したものをヒントに、折口の恋を再び見つめてみようとする試みです。

やぶくみこ　Kumiko Yabu

音楽家／作曲家。1982年岸和田生まれ。京都在住。英国ヨーク大学大学院修了（コミュニティーミュージック）。ジャワガムランや様々な楽器を用いて、楽器の本来持つ響きや音色、演奏する空間を生かした作品を提示するほか、舞台芸術の音楽も手がける。京都にて即興から音楽を作るガムラングループ"スカルグンディス"を主宰。「待つ、ひらく、尊重する」をヒントに新たな共同作曲の可能性を模索する。淡路島にて野村誠と『瓦の音楽』を2014年より監修。2018年はマルセイユの国立演劇学校にて講師、城崎国際アートセンターにて即興と作曲のワークショップを定期開催。

https://www.kumikoyabu.com/

木野彩子　Saiko Kino

札幌生まれ。幼少よりモダンダンスを始め、ソロを中心に自らの身体と向かい合い続ける。

"Edge"でYokohama solo duo competition 2003財団賞を受賞。2004年文化庁在外派遣研修員、2005年よりRussell Maliphant Companyのダンサーとして活動。帰国後はセルフドキュメンタリーの手法を用いリサーチに基づくダンス作品を制作している。代表作に"静"、"からたちから"、"Mobius"、"ダンスハ體育ナリ"など。

2016年より鳥取大学地域学部附属芸術文化センター講師。2017年即興音楽とダンスを鳥取のまちなかで展開する鳥取夏至祭を開始。

https://saikokino.jimdo.com

三浦あさ子　Asako Miura

舞台照明家。東京都出身。多くの振付家・演出家・ダンサーと作品作りをともにする。

木野彩子とは2010「かめりあ」2012-14「しづ」・「静」シリーズおよび「AMANOGAWAプロジェクト新百合ケ丘（映像作品）」をともに製作。

杵屋三七郎　Sanshichiro Kineya

日本伝統音楽　長唄　唄方

三代目杵屋三左衛門に師事する。京都妙心寺大法院閑栖松岡宗訓調に入門し、茶道、花などを学ぶ。東京芸術大学音楽学部卒。国内外で様々なジャンルのアーティストとの作品参加も多く、その歌声は高く評価されている。日本の伝統芸術や音楽を尊重し、現代に生きる古典という三七郎独自の世界を生んでいる。

Re-interpreting "The Book of the Dead"

The Book of the Dead—An explanation: The poet and outstanding ethnologist's Shinobu Orikuchi's autobiographical novel based on the legend of Chujo-hime, who, according to legend wove the mandalas at the Taima-dera monastery.

Synopsis: During the period the city of Heijyo-kyo prospered, on the spring equinox day, the nobleman of Fujiwara Nanke (modelled on Chujo-hime) caught sight of a ghost as the sun went down behind Mount Futagamiyama. After that, guided by the fulfilment of the 1,000 hand-copied sutras, she kept seeing Shigatsu-hiko (modelled on Ohtsu-no-miko), who had come to a tragic end, and began weaving the ghostly shape into the mandala with lotuses. By finishing weaving Mandala, the maiden soothed the wandering soul and was herself guided to the Pure Land.

What has long fascinated many of Orikuchi's readers was not only how he re-created both Shigatsu-hiko's and the maiden's story like a movie collage, but also how he depicted the unique world in which masculinity and femininity intersect with this world and the other world. "While writing, my body was as though in a dream, and at one stage I found myself lying on Chujo-hime," [He also wrote in his essay "The cause of Yamagoshi Amida"].

This project is an attempt to seek out the root of a dance that prays for the beyond of this world and that world, to transcend time and space, from Orikuchi's artistic discoveries and once again looking at his ideal of love.